

親鸞仏教センター通信

2008.
December

2008年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第28号

孤立と独立

親鸞仏教センター研究員 楠 宏 生

私たちが仏の教えに出会い、教えに聞いていくということの中で、絶えず問いかけられていることは、「ひとりの人間として独立しなさい」「真実に出会いなさい」ということであろう。しかし、私たちは、そのような言葉を実際に聞いていくことができるのだろうか。

「真実に出会いなさい」「ひとりの人間として独立しなさい」という呼びかけは、仏の教えによって自己存在が明らかにされていくことを意味する。それは、仏教が明らかにしている課題をとおして自己を学んでいきなさい、という問いかけに他ならない。そして、人間の苦悩を見つめ、その一人ひとりに智慧を成就してきた歴史、それがまさしく仏教の歴史であった。ところで、私たちが仏教に関心をもち、知識が増えても、そのままで仏教の教えを聞く者とは言えない。現実の自分の心のままで、仏教を学んでいけば、次第に仏教の教えが明らかになっていくように思うのは誤解であろう。仏の教えを学びながら、本当に自分自身を尋ねる。また、自分自身が仏から問われる、ということがないならば、たとえ仏教を学んでいても、いつも不安に満ちていて、自暴自棄になり、行き詰ってしまうことにもなる。場合によっては、その怒りの矛先が、人間関係を壊し、最後には“わたし”という存在を否定してしまうことさえある。

安田理深先生は、『縁起と性起』(永田文昌堂、1963)の「孤と独」という一節の中で、仏の教えによって開かれる人間像、人間関係を次のように教えてくださっている。「世親が我一心といわれるように、我信ずる心によって我がなりたつ。我があって信を起すのではない。(中略)信心がなければ我はない。我執があるだけである」と言われ、その我執のすがたを「人と人との関係、人と仏との関係を引き裂くのは執になる」と述べておられる。私の心、我執の心から信仰が生まれるのではなく、そこに人間の成就があるわけでもない。だから、私の心によって人間関係が開かれていくのではない、ということである。

独立とは、仏教の信仰、「如来廻向の信心」によって自らを自覚することであり、それは自分では独立することのできない私の心の闇を自覚することでもあろう。また、孤立とは、どこまでも自己の意識を肯定することによって生じる私の事実ではなからうか。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑧

道場の学問

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第18回、19回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第18回では、「無上殊勝の願」について、第19回では、「回向の起点としての『超発』」についてセンター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行なわれた第16回からその一部を紹介する。（囑託研究員 越部良一）

■ 道場

『無量寿経』に、「我仏に^な作らん、国土をし第一ならしめん。その衆、^{きみよう}奇妙にして、^{じよう ちようぜつ}道場、超絶ならん」（『真宗聖典』12頁、東本願寺出版部）とあります。「奇妙」は、現代語の奇妙^{きてれつ}奇天烈の奇妙ではない。「妙」という字は、たえなる、すばらしいという意味をもってあります。鈴木大拙先生は、この妙という字を wonderful と訳すのです。wonderful という言葉は、逆に日本語にしようとするといふ翻訳語がないのです。すばらしい、すてきな、不思議など、いろいろと言ってみるけれど、wonderful という感動をびたっと表す日本語がない。この妙は、wonderful なのですね。奇は、^{まれ}希であるということで、滅多になくてすばらしい。そういう意味です。それが日常語になると、へんちくりんでわからないという意味になってしまふ。どうも仏教語は、日常語で残るときには、大体悪意のあるものに変ずる。いま残っている仏教語を尋ねると、大概あまりよい意味で

はないのです。大事な真理を表している言葉なのだけれど、その真理ではなくて、悪い意味で残る。どうも困ったものですね。

「道場」という言葉は、これはいまも生きておりますが、道の間ですね。道は中国語でタオという。これは人びとが歩くところが、もとの意味でしょうけれど、何か共通してみんなが歩んでいけるような、往来できる道という意味をもってくる。そして、人間が自分の精神的な糧^{かて}を求めて生きるときに、その生きる方向性とか生きるよすがになるようなもの、自分の忘れてはならない精神的な支柱、そういう意味が道に出て来ます。こうした意味が普遍化されると、茶道とか柔道とか、何でも道が付くわけですが、仏道というのも、仏を求めて歩むということが、道の意味をもつということでしょう。その道が一旦確認されると、その道を歩むことで、道心、道の心が鼓舞され、道を思い起こすことによって、心が壊れていかない。そういうような意味を、道という言葉がもってくる。

道場というのは、そういう道を生み出してくるような場。剣道場とか、柔道場とかいうのは、そこに行けば、共にその道を求める人たちが、そこで道を養える場所です。仏教の道場も、仏を求める人たちが、そこで生活したり、そこに行くことにおいて、仏を求める心が鼓舞される。そういう場所が、道場という意味をもっている。

だから、法蔵菩薩が国を造る、その国が浄土という意味をもってくるわけですが、そこは道場という意味をもっているわけです。そこでお

眠りくださいと言われたりすることがありますけれど、眠れるところではない。仏道を求める場所が、浄土です。寝るために行くのなら、道場ではなくなります。その道を自らも生き、人びとと共に実践する場所が、道場です。

■ 近代の学問

近代に入って、段々、道という言葉もすたれてきましたし、この道場という言葉も何か狭い概念になっていったふしがあります。

清沢満之が、明治34（1901）年10月、いまから、百年ちょっと前ですが、東京に大学を建てた。その開設のときに、開学記念の会を開催した。その会に、当時の文部大臣や東京の知事の祝辞がよせられたという意気軒昂な時代です。その席で、この大学は自信教人信の誠を尽くすべき人物を養成する学場でありまうと、開学記念講演をしたと伝えられております。つまり、これは仏教の道場ということでしょう。

近代の大学、特に日本の大学は、サイエンスが学問だと。つまり、人間の対象になるもの、対象界を研究することが学問だ、そういう学問概念で、大学と称する教育の最高機関というもののが設けられ、そこで研究、教育をするときには、学問とは科学であると。ですから、道場という概念の大学というのは、まあ、矛盾概念といえますか、自己関心、自己を育てる関心というものを、どこかでさえぎるようにして、外側の客観的な、誰でもが証明したり、検証したりできる世界の論理やら内容やらを研究する。仏教というようなものも、文献学、古代語の研究とか、古代文献の研究ということが、学問だと。こういうふうと考えられてしまった。学びというものの質が、何か人間そのものをどこかで非常に強くネグレクト（neglect）してしまう。そういう傾向性が強く近代日本を牛耳ってきたのではないかと思います。

私は、忘れもしないのですが、70年安保の時に、大学で職を得たばかりでしたが、学生から

散々怒られました。お前のやっていることは学問ではないと。客観的なものをちゃんと研究するのが学問だ。お前のは何だ。自分の主体を研究する、そのようなものは学問にならないと。だから、先生によってはやめてしまうわけです。たとえば自分は小説を書きたいとなったら、学問はやっていられないということになる。そういう学問が、圧倒的に力をもったのが、近代の日本の大学ではないでしょうか。

客観的なものをひたすら研究するのが学問であると、そういう誤解が学問という言葉についてしまった。ですから、道場であって学問をする。そういう学びがあるのだということ、これは非常に大事なのではないかと思います。それを失えば、仏教の学びをする大学は成り立たない。文献学だけであつたら、道を求める人間が学問をするということが学問ではないということになったら、非常に貧困な人間しか育たないことになります。ですから、近代をおおっている、そうした学問観は改められなければいけないのではないかと、そういうことを思います。

（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」の講演録（全47回分：2001年11月～2006年8月）が、3巻本として出版されています。問い合わせと申し込みは、樹心社（TEL 042-577-2778）まで。

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2008年12月24日（水）午後6時30分～9時
2009年1月29日（木）同 上
2月5日（木）同 上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

薩となづけて、月天子とあらわる。生死の長夜をてらして、智慧をひらかしめんとなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五四八頁)

語 註

①【観音・勢至】観世音菩薩・大勢至菩薩のこと。

観音は慈悲、勢至は智慧を象徴する菩薩で、共に阿弥陀仏の脇侍である。親鸞は『和讃』等で、聖徳太子を観音菩薩、法然上人を勢至菩薩の化身と仰いでいる。『観無量寿経』には、この二菩薩が阿弥陀仏を助けて衆生を教化する(『真宗聖典』一一二頁)とも、念仏者のために勝れた友になる(『同』一二二頁)とも説かれている。

試訳をめぐって

【原文】南無阿弥陀仏は智慧の号なれば、この不可思議光仏の御なを信受して、憶念すれば、観音・勢至は、かならずかけのかたちにそえるがごとくなり。

「観音・勢至は、かならずかけのかたちにそえるがごとくなり」。単なる抽象的表現ではない、実感がこの言葉には込められている。それは日本に仏教を広められた聖徳太子の存在、そして生涯の師、法然上人に遇ったという、この人に出遇わなければ……という感動である。その感銘の深さが後の、「生死の長夜をてらして、智慧をひらかしめんとなり」という文章にも読み取れるのではないか。

浄土教には、阿弥陀如来が観音と勢至を引き連れてくるという伝統的概念がある。それを親鸞はあえて壊し、阿弥陀如来の用らきが、観音とあらわれ勢至としめすといひ、無明の闇をはらす用らきの象徴として、すなわち信心の利益(内容)として押さえているのである。

現代語化という作業は、ややもするとどこまでも客観的解釈となってしまう。親鸞聖人が自ら証された信仰の内実・具体性を失わせないよう議論を重ね、結果として、ここでは必要最小限の現代語化に留めることとなった。

(訳・語註…親鸞仏教センター)

四域経』には、観音を「宝応声菩薩」と名づけて、日天子とよんでいる。これは、日の光が闇を破るように、われわれの存在を暗くする根本原因である「無明」という闇を破ってくださるからである。勢至を「宝吉祥菩薩」となづけて、

月天子として表わされている。月の光が静かに夜の闇を照らすように、長い夜にも似た生死の迷暗を照らして、智慧を開いてくださるということである。

『anjali』第16号および

『現代と親鸞』第16号を刊行

このたび、『anjali』第16号(写真上)並びに『現代と親鸞』第16号(写真下)を刊行しました。

『anjali』第16号では、北海道大学公政策大学院准教授の中島岳志氏、社会学者の上野千鶴子氏、筑波大学大学院教授の好井裕明氏、作曲家の伊東乾氏、中国料理シェフの山中一男氏、東京大学生産技術研究所教授の山本良一氏、早稲田大学教授の池田清彦氏、お茶の水女子大学大学院准教授の頼住光子氏、哲学者の長谷川宏氏など、十名の専門分野の方々に、現代社会の課題や最先端での苦闘について、ご執筆いただいています。

一方の『現代と親鸞』第16号では研究論文のほか、現代と親鸞の研究会から、フोटोजーナリストの藤田庄市氏、宗教学者の弓山達也氏の問題提起と質疑、「英訳」教行信証「研究会」からニューヨーク州立大学アルバニー校准教授のマーク・L・ブラム氏の講義と質疑。また、「公開講演会2007」から、NPO法人「場の研究所」所長の清水博氏、本多弘之所長の講演及び事前学習会における東京工業大学大学院准教授の三宅美博氏の講義。また、大谷大学非常勤講師の羽塚高照氏(元親鸞仏教センター研究員)の鈴木大拙訳「英訳」教行信証「研究ノート」さらに、本多所長の問題提起(三講座分)を掲載しています。



『聖典』の試訳（現代語化）

「無明の黒闇」「生死の長夜」と親鸞は表現する。それは存在を暗くし、人生全体を覆い尽くしている、一向に光の見えない深い闇への恐れ。何のために人は生まれ、死んでいくのか……、まさに一寸先が見えないような暗黒世界。その意味内容を敢えて開くとするなら、生きることの「徒勞」、人生への「虚無感」とも言えるだろうか。これは現代を生きる私たちにも通ずる問題である。現代は、そういう問題を抱えていながら、言葉本来の迫力が急速に見失われている時代なのかもしれない。

「無明の黒闇をはらわしむ」。親鸞はこの無明が払われることが信心の利益だと言う。しかし、それは煩惱が無くなるということでは決してない。どれだけ妨げがあっても、黒闇と言わなければならぬ（闇）があってもそれを貫いてくる「光」が身に染み徹る。それは、「智慧の名号」たる所以である。

（囑託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳④

原文

「観音勢至自来迎」というは、南無阿弥陀仏は智慧の名号なれば、この不可思議光仏の御なを信受して、憶念すれば、観音・勢至は、かならずかげのかたちに見えるがごとくなり。この無碍光仏は、観音とあらわれ、勢至としめす。あは、観音には、観音を宝応声菩薩となづけて、日天子としめす。これは無明の黒闇をはらわしむ。勢至を宝吉祥菩薩

現代語訳

「観音勢至自来迎」について。南無阿弥陀仏は智慧の名号であるから、不可思議光仏（阿弥陀如来）の御名を信じて、絶えず深く憶い念ずるならば、観音菩薩と勢至菩薩は、影が必ずかたちに添うように、その信ずる人にはたらいてくるのである。この無碍光仏（阿弥陀如来）のはたらきは、観音菩薩として現れ、勢至菩薩として示される。ある經典（『須弥

親鸞仏教センターの動き

（2008・9・11）抄出

■2008年

- 9・1 機関紙「親鸞仏教センター通信」第27号を発行。
- 9・4 第74回清沢満之研究会
学会発表（楠宏生研究員「婆沙論」における離繫得について・日本印度学仏教学会第59回大会・愛知学院大学）
- 9・12 親鸞聖人ご命日のつどい
学会発表（春近敬囑託研究員「多田鼎の思想 遍歴・清沢満之との関係を通して」・日本宗教学会第67回大会・筑波大学）
- 9・15 第29回「唯信鈔文意」研究会
第5回鈴木大拙訳「教行信証」の考究
- 9・19 第102回英訳「教行信証」研究会
本多弘之所長「副講」授与記念講演会・学士会館
- 10・2 第12回英訳「教行信証」再版編集会議
学会発表（山本伸裕研究員「清沢満之における「深信」の構造」・日本倫理学会第59回大会・筑波大学）
- 10・3 第30回「唯信鈔文意」研究会
第19回（通算・第70回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 10・4 親鸞聖人ご命日のつどい
第75回清沢満之研究会
- 10・6 第6回鈴木大拙訳「教行信証」の考究
第103回英訳「教行信証」研究会
- 10・10 第36回現代と親鸞の研究會「経済は本当に人間を豊かにするの か」慶應義塾大学教授・金子勝氏（豊島区・メトロポリタンプラザ）
- 10・14 親鸞聖人ご命日のつどい
「公開講演会2008」テーマ「現代社会における「救い」」。神戸女学院大学教授・内田樹氏、本多弘之所長（ベルサール八重洲（Room3）・東京都中央区）
- 11・11 第4回研究員と読む公開輪読会「清沢満之と生命の倫理」①11/28、②12/5、③12/12、④12/19（文京区・東京大学仏教会館）
- 11・28 情報誌「BIBLITE」第16号、研究誌「現代と親鸞」第16号、機関紙「親鸞仏教センター通信」第28号を発行。

現代と親鸞の研究会・第29回

善悪を超える

—人間回復への試み—

津田塾大学准教授 坂 上 香



坂上 香氏

2008年1月11日、アルカディア市ヶ谷（千代田区）において、津田塾大学学芸学部英文学科准教授である坂上香氏をお迎えして「現代と親鸞の研究会」を開催した。犯罪や暴力の当事者（被害者、加害者、周辺社会）がマス・メディアによってどのように報道され、それが社会全体にどんな影響を与えているのかを明らかにしながら、被害者と加害者が共生できる社会を模索されている坂上氏に「善悪を超える—人間回復への試み—」をテーマに語っていただいた。ここに、その一部を紹介する。

（嘱託研究員 本多雅人）

■ 和解——死刑以外で解決を求めること

私は、アメリカでのアムネスティ・インターナショナルの活動をとおして、死刑は犯罪の抑止力にならないのに、なぜ死刑制度があるか疑問をもつようになりました。また、被害者のために死刑はなくなるべきではないと感じていましたが、ペロニカさんという女性との出会いによって、死刑を望まない被害者も、当然のことながらいるのだと気がつかされたのです。

では、被害者と加害者の共生は可能なのでしょうか。その試みをしているアメリカの「ジャーニー・オブ・ホープ」について、まずお話をしたいと思います。

「ジャーニー・オブ・ホープ」（以下、「ジャーニー」とは希望を追い求める旅という意味です。「ジャーニー」は死刑囚の家族と被害者の遺族という、まったくちがう立場の人たちが、死刑に反対するという目的で二週間

いっしょに時を過ごして、死刑制度がある州の一般市民に向けて語り歩くのです。そこで、被害者と加害者の憎しみや恨みを乗り越えた姿が見られることは、とても注目すべきことなのです。日本でも別に死刑にしがみつかななくてもいいのではないかなと思えるきっかけを作りたいと考え、企画を書いた結果、「ジャーニー」は番組化され、1996年にNHKの衛星放送で、その後地上波でも再放送されました。

90年代の終わりくらいから「ジャーニー」という団体と、MVFR（Murder Victims Families for Reconciliation）という和解のための殺人被害者遺族の会に分かれますが、いずれにしても、被害者遺族も、死刑囚の家族も両方とも「殺人」の被害者だと、彼らは考えています。死刑は、国家によって人を殺すことだから、殺人事件の被害者遺族も、死刑で命を奪われた家族も同じだという考えで活動しているのです。人に死を求めず事件に向き合うことが彼らにとっての「和解」だと取材をとおして感じました。

強盗殺人事件で弟さんが殺され、『弟を殺した彼と僕』（ポプラ社）をお書きになった原田正治さんがこの「ジャーニー」に感銘を受け、2003年に一人で日本を行脚され、自分の体験と死刑ではないものも求めるということを語られました。そういう活動を基に彼は「オーシャンズ」という団体を立ち上げ、写真家のトシ・カザマさんたちの支援を受けながら、いま地道な活動を始めようとしているところです。

■ 犯罪者の社会復帰への取り組み

続いて「アミティ」という犯罪者の更生施設

についてのお話をしたいと思います。「アミティ」は友情とか友愛を意味する団体で、犯罪者やあらゆる依存症の社会復帰を支援しています。ここでの生活は3カ月から2年までと、人によって異なります。家族といっしょに暮らすことも許されているアメリカでも^{まれ}稀な施設です。「アミティ」では毎年3回、リトリートと呼ばれる集中体験講座が開かれます。期間は一週間、集中講座のテーマは毎回異なります。私がおどろいたことは、スタッフとここに暮らしているレジデントと呼ばれる加害体験のある人たちが、ほとんど同じ目線なのです。普段着を着ているし、名札もないし、帽子を被っているわけでもありません。誰がスタッフで誰がレジデントなのかは見分けが付きません。とても対等な^{まなざ}眼差しで、またスタッフの人たちが非常にオープンなのです。

私はこの「アミティ」と1995年以来関係を築き、2004年にはカリフォルニア州のサンディエゴ郊外のR・Jドノバン刑務所が舞台となった『Lifers』という映画を作りました。200人の参加受刑者たちが、「自分がなぜ犯罪をするようになったのか」という問いに徹底的に向き合い、そのために虐待や家庭崩壊など自分の体験を語りながら、罪の償いを模索して、「どのような未来を生きていくか」を真剣に考えていくプログラムです。そういう試みがアメリカでは行われているのです。

■ 映像製作で見てきたこと

映像制作の現場で見てきたことは、日本のマス・メディアで報道されているのは、特に犯罪、暴力に限定されているということでした。毎日膨大な量の犯罪報道が流れていて、私たちに伝わってくるのがその一部にすぎないとしたら、マス・メディアの影響はすごく大きいだけに、それはとても危険なことです。私がテレビの現場にいるときから心がけていたことは、テレビが報道したがるものに目を向けて、取材をしていくことでした。私たちは、イージーにアクセスできる声だけではなくて、それ以外の声にも耳を傾けることが必要なのではないか

と思います。アメリカの死刑をめぐる「ジャーニー」の番組を作り、アメリカの犯罪者の更生をめぐる「隠された過去への叫び」という番組を作りましたが、それはアメリカの事情を単に知らせたかったからではなく、むしろ日本の状況を変えたいというか、みんなに関心をもってもらいたいというところから始まっているのです。問題を指摘するだけでオルタナティブな社会の像が描けないと、いまあるものにしがみついてしまいます。さまざまな声を聞くことによって、もうひとつの社会、コミュニティのあり方が可能であるというビジョンをもつことが大切だと思います。

(文責：親鸞仏教センター)

※坂上香氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第17号（2009年3月1日号）に掲載予定です。

坂上 香（さかがみ かおり）津田塾大学准教授

1965年、大阪府に生まれる。国立音楽大学附属音楽高等学校普通科卒業後、渡米。ウエストバージニア大学国際関係学及びスペイン語併学専攻卒業、ピッツバーグ大学大学院社会経済開発学専攻修士課程修了。テレビ番組制作会社のディレクターの後、京都文教大学文化人類学科助教授を経て、現在、津田塾大学学芸学部英文学科准教授。映像ジャーナリスト。ドキュメンタリー映像作家。著書に『癒しと和解への旅—犯罪被害者と死刑囚の家族たち』（岩波書店）、共編著に『アミティ・「脱暴力」への挑戦—傷ついた自己とエモショナル・リテラシー』（日本評論社）など多数。また、映像作品にNHK日曜スペシャル『ジャーニー・オブ・ホープ』（文化庁芸術祭優秀作品賞）、『ライフアーズ—終身刑を超えて』（New York International Independent Film and Video Festival海外ドキュメンタリー部門最優秀作品、SIGNIS JAPAN〈日本カトリックメディア協議会〉2004年度「日本カトリック映画賞」受賞）など多数。



「現代と親鸞の研究会」（千代田区の「アルカディア市ヶ谷」で）

親鸞仏教センター研究員と読む——公開輪読会2008

「濁世じよくせにおいて、いま、新たに仏教に学ぶ」 参加者募集中!

2008年度の公開輪読会は、東京大学仏青会館（文京区・本郷）において、「濁世において、いま、新たに仏教に学ぶ」をテーマに、下記のとおり開催します。当センターの研究員と一緒に仏教の聖典をひもとき、自己とは何か、人間はなぜ悩むのか、人類の歴史を貫いてあきらかにされてきた仏教の言葉に、現代を生きる力を見いだしていきたいと思ひます。

初めての方もどうぞお気軽にご参加ください。（以下の詳細は、開催日程順です）

■「清沢満之と生命の倫理」(全4回)

昨今の目覚ましい医療技術の発展は、生命倫理というかたちで、喫緊の課題を投げかけるようになってきている。清沢満之の思想は、現代社会が抱える諸課題にどのように応え得るであろうか。

日 時：2008年11月28日(金)
12月5日(金)、12日(金)、19日(金)
いずれも午後6時30分～8時30分

担 当：山本伸裕(やまもと のぶひろ)研究員
テキスト：『清沢満之全集』（法蔵館）より抜粋
資 料 代：500円（4回分）

■「法の分析—仏弟子たちの思索—『倶舎論』くしやろんを読む」(全4回)

インドの仏教思想家、世親が著した『倶舎論』は、長らく仏教の基礎学として、多くの仏教徒たちに親しく学ばれてきた。仏教学の伝統的な思索が人間存在をどのように見つめてきたのか学んでいきたい。

日 時：2009年1月9日(金)、13日(火)
23日(金)、30日(金)
いずれも午後6時30分～8時30分

担 当：楠 宏生(くすのき こうしょう)研究員
テキスト：『倶舎論』より抜粋
資 料 代：500円（4回分）



■「蓮如からの手紙—『御文』を読む—」(全4回)

蓮如は門徒へ宛てた手紙を通じて多くの人に教えを伝えようとした。難解な教義の言葉が通じなくなっている現代において、わかりやすい言葉で教えを説こうとした蓮如の思いをあらためて受け止めてみたい。

日 時：2009年2月6日(金)、13日(金)
20日(金)、27日(金)
いずれも午後6時30分～8時30分

担 当：常塚 聡(つねづか あきら)研究員
テキスト：『御文 第五帖』、『真宗聖典』
(東本願寺出版部)より抜粋
資 料 代：500円（4回分）



■申し込みと問い合わせ

参加ご希望の方は、下記までご連絡ください。参加費は無料ですが、資料代をご負担願ひます。定員35名。連続12回の講座ですが、途中からの参加も受け付けます。

親鸞仏教センター公開輪読会2008 T係

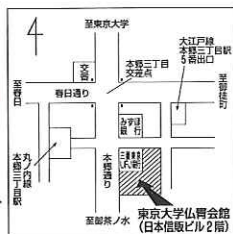
〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL 03-3814-4900・FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

■会 場

東京大学仏青会館2階ホール
(文京区本郷三丁目・日本信販ビル2階)



東京メトロ丸ノ内線「本郷三丁目」駅徒歩3分
都営大江戸線「本郷三丁目」駅徒歩1分

親鸞仏教センターの発行物をご自宅にお届けします。

年会費1,000円（送料込）で、『アンジャリ (anjali)』（年2回）と『親鸞仏教センター通信』（年4回）をご自宅にお届けします。ぜひ「アンジャリの会」にご入会ください。知人や友人等のご紹介もお受けします。また、バックナンバーのご希望も承ります。

申し込みと問い合わせは、親鸞仏教センター内「アンジャリの会」係（TEL 03-3814-4900）まで。

会員募集中!

あ と が き

当センター研究員と読む「公開輪読会2008」が始まった。それぞれ担当する研究員には、輪読会での討論から各自の研究課題をさらに深めてもらいたい。また、始めて参加される方に内容が理解されるよう如何に話すかにも重きをおいてほしい。「清沢満之」「世親」「蓮如」、それぞれ生きた時代は違っても、仏の教えにうき生きていった先人の言葉をとおして、「濁世」という今を私たちがどのように生きていけばよいか、参加者の一人として、真に生きる方向性を仏の教えに尋ねる機会にしたい▼このたび、本多弘之所長が当派の学階「嗣講」を授与され、さる10月2日、千代田区神田錦町の学士会館にて記念講演と祝賀会が開かれた。当日は200人を超える出席者に、「共存在の生産原理—欲生心の僧伽」の講題で記念講演が行われた。また「若い方々には是非近代真宗教学の研鑽に励んで欲しい」との本多所長の願ひから記念講演に先立ち、当センターの田村晃徳嘱託研究員と嵩海史元研究員がそれぞれ「擬講」授与の研究発表を行った▼当センターの取り組みは、「客観的なものをひたすら研究するのが学問である」という近代の学問観に対して、「自己の主体を研究する」学問であることを実証していく挑戦でもあると思う。現代に向き合い現代に生きる人に、親鸞聖人の信念と思想を語る機会と場の重要性を痛感している。（木曾）